

LLA シニア会通信 No. 5

—FLEAT VII 開催に向けて

May 16, 2018

はじめに

2019年8月6日(火)から9日(金)の4日間の予定で、FLEAT (Foreign Language Education and Technology) VIIが早稲田大学早稲田キャンパスで開催されることが決まった。本号では、外国語教育メディア学会(LET)とInternational Association for Language Learning Technology (IALLT)が共同開催する7回目の国際大会に向けて、FLEATの歴史を振り返りながら、大会を共に作りあげてきたLLAシニア会員とIALLTの元会長の寄稿文を掲載した。本号をお読みいただいた方々がFLEATへの理解を深め、大会を成功に導いていただければ幸いである。



FLEAT VII 主会場の早稲田大学
早稲田キャンパス 11号館周辺

FLEATの歩み

- FLEAT I: 1981年8月18日~21日 ホテルオークラ東京
IALLTの前身 NALLD (the National Association of Learning Laboratory Directors) との共催。海外からの77名を含め約700名の参加者。
- FLEAT II: 1992年8月4日~7日 名古屋国際センター・中部大学
中部支部が主体となって、11年ぶりのFLEATをIALL (the International Association for Learning Laboratories) と共同開催。
- FLEAT III: 1997年8月12日~16日 カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、ビクトリア大学
北米大陸での初めてのFLEAT開催。本大会後IALLからIALLTに名称変更。
- FLEAT IV: 2000年7月29日~8月1日 神戸ベイシェラトンホテル&タワーズ
LLA創立40周年にあたる記念大会。KAMALL (韓国)、APAMALL (アジア太平洋)、ROCMELLA (台湾) との交流も図った国際色豊かな大会。
- FLEAT V: 2005年8月5日~10日 米国、ユタ州、ブリガム・ヤング大学
Uniting the Worldの大会テーマのもと、日本を含めた世界中からの参加者が集まった。
- FLEAT VI: 2015年8月10日~15日 米国、マサチューセッツ州、ハーバード大学
10年ぶりのFLEATを再び米国で開催。IALLT創立50周年の記念大会。
- FLEAT VII: 2019年8月6日~9日(予定) 早稲田大学早稲田キャンパス

座談会「FLEAT I 開催よもやま話」

出席者：黄金井健夫（K）、滝本晴男（T）、見上 晃（M）

聞き手：大八木廣人（O）

あの頃の3人

O: 1981年に学会として初めての国際大会 FLEAT I がホテルオークラで開催され、その後数回の国際大会を経て 2019年に FLEAT VII が関東支部が中心となって開催されることになりました。そこで FLEAT I の裏方で活躍された黄金井、滝本、見上の三氏に当時の苦労話をしていただき、FLEAT VII を担当する現役の方々の参考になればとこの座談会を企画しました。本題に入る前に3人は関東支部の若手として LLA (現 LET) の名称変更や、SONY と共同で LL システムの開発等で活躍されましたけれども、FLEAT I 当時はどういうポジションだったんですか。

M: 当時、私はまだ高校の教員で LLA に入ったばかりで、FLEAT I の裏方として活躍したというほど仕事はしていなかったですね⁽¹⁾。

K: 見上さんとは LLA で一緒にいる前に、ある研修会で一緒に仕事をしたことがあります。当時から明晰すぎて第一印象はよくなかったですね。(笑い)

T: 私は明学(明治学院大学)の外語研(外国語教育研究所)から LLA の本部があった大妻(大妻女子大学)に移って間もない頃でしたから、当時は LLA の本部サイドからの手伝いが多かったですね。FLEAT I では、大妻の佐藤(一)さんと、当時はまだ珍しかったビデオ記録や機器管理等で関わっていました。明学で2年間黄金井さんと一緒に働いていたので、FLEAT I の司令塔だった黄金井さんとはあうんの呼吸で仕事ができました。それに明学時代ビデオ教材作成で黄金井さんにいじめられたことが役

に立ちました。(笑い)

O: 黄金井さんは FLEAT I の本部があった明治学院勤務でしたね。

K: そうです。明学の外語研で助手をしていました。掃除から教材作成や LL 授業まであらゆることをやっていました。

O: FLEAT I の本部が明学になった経緯は。

K: 確か 79 年に FLEAT 開催が決まり、大会実行委員長が明学の高本(捨三郎)先生に決まったので、80年の3月に明学の外語研に FLEAT 本部事務局を置くということになりました。そのためそれまで明学にあった支部事務局を早稲田大学に移しました。

FLEAT I の始まり

O: そもそも FLEAT が開催されることになったきっかけはどのようなことでしたかね。

K: 天野(一夫)先生が NALLD(現在の IALLT)の機関誌である「NALLD Journal」を購読していて、当時の LLA は教員ばかりでなく LL スタッフの会員も多かったです。NALLD でも同じような状況で、スタッフ(director)の役割が大きい LL 教育について研究している学会なので、協力して国際大会を開催してはという提案がありました。

T: 確か、その前に UNESCO と関係のあった中野(照海)先生が天野先生に世界規模の大会をやろうと持ちかけたのが発端だと思います。

O: 天野先生が非常に熱心でしたが、関西支部長の西本(三十二)先生からも世界大会の提案があって、国際大会開催への機運が高まりました。

M: 現在4支部が持ち回りのようなかたちで世界大会(FLEAT)を開催している状況になってきて、一応4支部一周して、2019年にまた関東に戻ってきたわけだけれども、これからも支部が主催する方式ではFLEAT Iのようにホテルを借り切ってしまうという大規模なものは難しいのではないのでしょうか。

O: FLEAT Iの決算報告書を見ると、参加者は招待者や展示関係者をも含めて約700名とあります。国外関係者では26カ国に呼びかけて9カ国から77名、展示企業が21社の参加があって、約2,900万円規模で行われました。成功裏に終了した要因は何でしょうか。

K: まずプログラム内容、資金、広報、役員の意気込み、一致協力体制、そしてスムーズな運営方法の確立などでしょうか。

資金調達はどうやって

O: まず資金面から伺いますが、どのように集めましたか。

K: どこでどのような補助金や助成金を出しているかという情報は、宇佐美先生の情報力がものすごく役に立ちました。

O: 具体的には。

K: 結果として、文部省(当時)から500万円、日本万博協会から400万円、放送文化基金から200万円、計1,200万円でしたね。

O: 文部省から500万円はよく出ましたね。

K: 文部省から補助金を得るには政治家を通すのが一番だということで、関東支部の理事の方々に何度となく議員会館等を回っていただいて、いわゆる文教族の議員に陳情しました。

T: その結果、文部大臣まで話が通ったんですよね。

K: そうです。天野先生をはじめとして役員の方々がいろいろなルートを通じて陳情した結果、文部大臣まで話が通るとトントン拍子で進展しました。役所の方も対応が一

変して、補助金申請書の書き方はもちろんのこと、大きさの違う資料の折り方に至るまで非常に細かいことまで丁寧に指導してくれました。

O: 万博協会は。

K: これは宇佐美情報で、大妻の佐藤さんと私が大阪の説明会に行って、その指示に従って申し込み、無事通ったわけです。

O: 放送文化基金は。

K: ご承知のように宇佐美先生はマスコミ出身だったので、有効な情報のおかげでも取得できました。

O: 他には。

K: トヨタ財団、自転車振興会、日本財団等々いくつかの助成金を出してくれるところの説明会に行き、申し込みましたが、残念ながら趣旨が違うのか駄目でした。

T: やはり補助金を出してくれる複数のところを当たってみるのは大事ですね。

K: そう。ダメ元でやってみる価値はありますね。

M: でも、今のLETでそれができるかどうか。理事、役員等が動くかどうか難しいのでは。

T: 時代的なものや、それだけ大きな大会を開く必要があるのかという気持ちもありますしね。

O: 寄付金も470万円と結構大きな額ですね。

K: 全会員に寄付のお願いをし、理事には半強制的に確か10万円だったと思いますが、寄付のお願いをしました。法人は通常の全国大会と同様に賛助会員にお願いをしました。当時大手企業のSONY、松下には100万円の寄付をお願いしたのですが、無理ということで、その代わりにSONYは大会期間中に厚木工場見学、松下は大阪空港から入国したNALLD会員に便宜を図って大会前に大阪の工場見学を実施してくれました。LLAから国際渉外担当の佐藤(寧)さんが大阪まで出迎えに行きましたね。

広報の重要性

～「日本記者クラブ」での記者会見～

- O: 広報については。
- K: これもマスコミ出身の先生の力は大きく、各マスコミに対する情報提供や、特に日本記者クラブで行った記者会見は大きな力となりましたね。
- T: 記者会見に参加したマスコミが多かったですね。
- M: 資料を見ても、5月末で220名の事前登録が記者会見の6月20日以降、7月には約360名、8月はじめに430名に増え、展示企業も8月には参加費の目標額に達しています。やはり展示企業に対してもマスコミに載るといって効果があるんですね。
- T: 近年、大会開催の情報提供、いわゆる広報の方法が内々的な感じで、もっとマスコミやインターネットを使って大々的に行ってもいいのではないのでしょうか。

スムーズな大会運営

～「大会運営係」が成功の決め手～

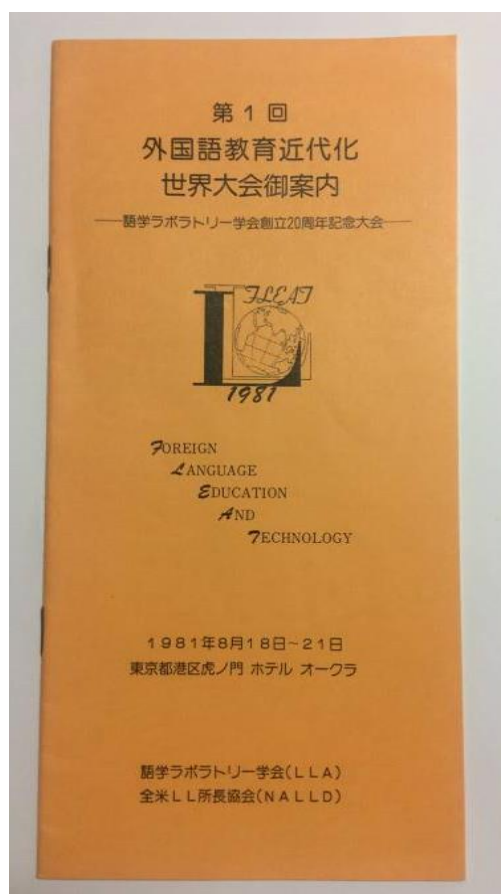
- O: スムーズな大会運営とはどういうことですか。
- K: 現在の全国研究大会などがどのように運営されているかわかりませんが、我々が運営委員をやっている時代の大会の運営の基礎がこのFLEAT Iで作られたと言っても過言ではありません。
- O: 具体的に言うとうどういうことですか。
- K: 例えば、B4用紙72頁にわたる業務指令書に、いつ、どこで、何が行われ、何がなされるべきか、そしてその責任者は誰かが表舞台(プログラム)と裏舞台(事務局サイド)別に記入されます。担当者が移動する場合は、いつ、どこへ移動するのか等が記入され、「大会運行表」には各会場毎に会場の備品等の位置、必要機器、設営時間、設営確認時間、プログラム内容、出演者、撤収時間、撤収確認時間等、各会場でなすべき事項がすべて記入されます。

O: そういうことは全国研究大会開催時にやっていたのではないですか。

K: そうなんです。でもFLEAT Iはホテルオークラで行われたため、今まで我々がやっていた機の移動や、マイクや機器の設置等すべてのことに対して「お客様にそういうことをさせるわけにはいかない」と言ってすべてホテル側が行うため、細かい指示を出さなければならなかったのです。機の配置、マイクの位置、高さ、テーブルクロスのおおきさや色等の細かい指示がすべて必要でした。そのためホテル側との意思疎通と、確認のために「大会運行表」と「業務指令書」が必要だったのです。

O: それは大変ですね。

K: そのほかに、司会、記録、会場責任者一覧表、参加者一覧表、昼食券配布一覧表、宿泊者一覧表など、あらゆる条件、状態で必



FLEAT Iの日本語版プログラム冊子

要な情報がすぐ得られようさまざまな資料を作成しました。一見無駄なようですが、これだけの大会になると何が起こるか分かりません。何かトラブルが発生した時に瞬時に指示しなければならないので、こうして一つの情報を縦、横、斜めからでも得られるようにしたのです。現在はコンピュータがあるので資料作りも非常に楽になりましたけれど、当時資料はすべて紙ベースでしたし大変でした。特に私は悪筆なので、資料はすべて英文タイプと和文タイプで作成しました。

T: とにかくすべての情報が本部に集まるようになっていましたね。

M: 大会で無線機を使うようになったのもこのときですね。

K: 各会場が正常に動いているか、トラブル発生時、現場で対応できないときの連絡等、移動本部的な係を作り、準備段階から明治学院の事務局ですっと一緒に仕事をしてきた南川(敬一)君と海老沢(努)君の両氏にその役をやって貰い、その連絡に無線機を使うようになりました。

O: ホテルのハウス電話もありますよね。

K: そうですね。でもよそのお客が使っていたり、電話がなかったりすると探さなければならず、その時間ももったいなくて、またイライラし、それが士気を下げってしまうので、瞬時に対応できるようにしました。

T: とにかくいろいろなことがすぐ判断され、指示が下されるということは裏方にとってひいては大会全体の進行にとって大事ですよ。そのためにも大会実行委員長は本部から動かず、何かあったらすぐ判断して指示できる体制を取ることが大事ですよ。

K: そう。このノウハウはあるファミレスのマニュアルに「店長は忙しいときほど動くな、全体の動きを把握し、人を動かせ」というのがあって、そこからもりました。

実行委員の意気込み、協力体制とは

O: 支出で大きいのが会場費の 740 万円、印刷費の 670 万円、交通宿泊費の 630 万円、通信運搬費の 220 万円、人件費の 200 万円ですか。

K: 印刷費には最終報告書の費用も入っていますね。また会議用の資料や事前の資料はコピーを利用しましたが、コピーも現在と違って非常に高かったので結構かかっていますね。

O: 交通宿泊費も少しかかっているように見えますが。

K: これは講演者はもちろん NALLD の役員等 8 人か 9 人分の交通費と宿泊費等です。また、理事はもとより実行委員もできる限りオークラに宿泊して貰い、その費用も入っています。

O: NALLD の役員たちには交通・宿泊費は払ったのですね。

K: そうです。

O: 他には。

K: 関東支部以外の理事のそれまでの会議出席のための交通宿泊費を含めたもの、それと関東支部の実行委員の宿泊費ですね。それと当時実行委員ではないけれど、実働部隊として働いてくれる人たちがいたじゃないですか。

O: 準備の段階からですね。

K: そうです。そういう人たちにも泊まって貰いました。幸いホテルはルームチャージなので私たちの部屋に泊まっていたですね。

T: タコ部屋でしたけれどね。

K: そう。だけど当時ホテルオークラに泊まるなんて凄いいことですからね。やる気を出して貰うためにそうしました。おかげで夜反省会をしたり、翌日の打ち合わせをしたり仕事がスムーズに運べる要因にもなりましたね。

T: あと、昼食用のカレーライス代がありますね。

K: そうそう、会場近くには食事をするところ

がなく、効率を考えるとホテルでするほかなかったんですね。しかしなんととってもオークラでそう安い料理もなく、そこでホテルと相談して LLA 専用のカレーライスを作って貰って、専用のクーポンを作りました。講演者、LLA の理事、実行委員、実働部隊、それにアルバイトまですべてこのクーポンを配布しました。後で使用されたクーポン数で料金精算しました。これは交通宿泊費か会場費かのどちらかから出しました。

M: それ以来、関東支部では地方で研究会等が開催される際に、実働部隊として業務を担ってくださる先生方で、大学からの出張費が期待出来ない先生方には、支部が交通宿泊費を負担するようになりました。

T: 宿泊したときの夜の運営委員会は楽しかったですね。偉い先生から我々若手までが一緒になって英語教育について議論しましたよね。

K: そう。普通だったら話もできないような高名な先生でも我々若手の意見を聞き、違うところは違うと、いろいろな議論をふっかけてもきちっと反応してくださいました。そこからいろいろな問題提起が出てきたり、新しい試みが生まれたり、本当に楽しかったですね。

O: それが関東支部のよいところでしたね。

K: FLEAT I でも大会が近づくと、鈴木(博)先生、宇佐美先生をはじめ高校部会の石川(達朗)先生、落合(二郎)先生等々いろいろな先生方が明学の本部に夕方から集まって準備を手伝っていただきました。

T: そう。毎晩のように、皆でよく、飽きもせずカツ丼を食べました。

大会の内容

O: 大会の内容についてはどうですか。

K: これについては我々はあまりにも若くて、勉強・情報不足で、年輩の先生方の決定に従いました。ただ大会を成功させるために必要なのは、やはりプログラム内容で、特に目玉となる講演者にかかるところが大きいと思います。FLEAT I でも Wilga Rivers, Peter Strevens, Joseph Hutchinson などを招聘することができました。また、日本の英語授業を見て貰うため、ビデオ・ショーや LLA の特徴でもあった校種別の発表会場も設けましたね。

運営委員に望むこと

O: 最後に、今の運営委員に望むことは。

T: 時代が変わったのかどうか、やはり我々が関東支部運営委員をやっていた頃と雰囲気



座談会メンバー（左から見上、黄金井、大八木、滝本）

気が変わってきたような気がします。

O: それはどういうところですか。

T: さっきも出ましたけれど、あの頃は運営委員会当日が待ち遠しくて…。 というのも、運営委員会は昔も今も事務的な話が多いんですけども、その後の夜の運営委員会で老若男女が入れ乱れて英語教育についていろいろ議論をして、そこから大会テーマや研究テーマなどが見つけられ、昼の運営委員会で実現化していく。

M: LL の急激な変化に危機感を覚え、LL とは何かという議論から学会の名称変更に関わり、授業研究のあり方から授業録画部会ができました。また運営委員会ではそれまでは支部長が議長をやっていたものを、あまりにも時間がかかるため効率的に進めるために、議長というポストが作られましたよね。

K: そう、我々若手が考えていることが実現化されていくことが非常に楽しかったですね。

T: 今の運営委員の人達はよい意味でもっと学会を利用してよいのではないのでしょうか。

K: もっと自分の考える、自分の求める日本の英語教育を実現化するために、発表だけでなく、大会テーマとして取り上げたり、シンポジウムやパネルディスカッションを企画したり、学会をもっと利用してよいのではないかと思います。

M: 同じテーマを何年か続けたこともありましたね。

T: LET はもっと授業そのものを活動の中心に据えてほしいですね。

K: 今、コンピュータやスマホが普及し IT や AI を利用した授業で CLIL や active learning など、新しい呼称でその言葉が一人歩きをしているような気がします。IT 等を利用しない授業、CLIL や active learning で行われたい授業は否定するような、またそれが絶対的なものであるとい

う方向性には疑問を感じます。今その危険性を LET の中にも感じます。

M: CLIL や active learning という言葉は以前はなかったけれど、昔からやっている先生はやっていましたよね。

T: 「運営委員会は楽しいですか」と聞いてみたいですね。

O: まだまだ皆さんの話を聞きたいんですけど、本日はこのへんで終わりと致します。2019 年開催の FLEAT VII が意義深い国際大会となり、それを契機に LET がますます活性化し、発展することを期待したいと思います。本日はありがとうございました。

注

⁽¹⁾見上氏は、LLA 紀要の第 1 巻第 1 号から第 17 号までに掲載された全論考を要約したものについて「理論」「授業技法」「教材の管理」「設備の技術」などいくつかのカテゴリーに分類し、そのメタ情報を冊子にされました。

国際学会の運営について

小池生夫

LET では関東支部が中心になって FLEAT を開くと伺ったが、準備をする前に心得ておいたほうがよいと思われることを若干書き、これから開催の準備をする人たちのお役に立てるなら喜ばしいと思う。

国際学会は準備に時間もお金も国内学会よりかかる。新支部長の下、体制を整えてできるだけはやく準備に入る必要がある。まずやることは大会テーマ、日時と場所をおさえることである。と同時に大会テーマに適応する海外、国内からの主たる講演者たちを確保することである。さらに大会運営費を集めなければならない。運営費次第で国際大会の規模が決まる。

海外からの講演者の航空運賃はこちらが負担するのだろう。大会会場費も相当かかるのが一般である。今回は早稲田大学にお願いして借用料は不要にしてもらえらるなら、本当にありがたいことではあるが、それでもかかるのはお金である。テーマは近未来を予測しての自動通信、自動翻訳、ロボットなどの学習利用と効率、それらの機器を利用して社会でのコミュニケーション手段の抜本的効率化、社会変革なども候補になりうるだろう。

高校学習指導要領改訂が今年 3 月に告示され、小、中とも合わせて一貫したグローバル化対応教育が大学入試の大改革とも合わせて実施される。オリンピック、パラリンピックもほぼ同じ時期に開催される。CEFR など国際基準の学力到達目標も具体化される。CLIL、SLA などを利用した様々な教授法、評価法の工夫が学校の英語教育に姿を現す。東南アジアでは学校に必要なになる。それには外国語教

育政策の提案が必要になる。

LET は他の学会の参加を呼び掛けて多角的な研究発表、シンポジウムを募集、開催するようにグローバル構想を固めてみたい。それには、関連学会、特に JACET の協力も求めたい。文部科学省の後援も求め、担当者の演説も求めたい。教室での工夫はビデオを使ってもよいだろう。

評価も大きなテーマになるだろう。特に小学校から高校、大学までスピーキング、リスニングなどの問題をどう対処すべきか、たんなる 4 技能のテストだけでなく、思考力、判断力、表現力の深さを求める学力形成において文科省の指導要領は全課程、全科目にこれを求めることになる。アメリカなど諸外国の外国語教育の教授法、評価はどうなるのであろうか。

本大会の構想をどの程度にするのかによるが、自分たちが中心になって企画し、実施するのであるから、大いに頑張って成功させてもらいたいものである。

FLEAT VII 開催で思うこと

宇佐美昇三

1. 安全の確保

日本で開催する場合、外国の参加者の心配事は「地震」と「テロ」だろう。路上や乗り物では世界一の安全な日本だ。

地震について：会場に 2 方向以上の戸口が必要。各戸口に誘導者を付け、非常時、ドアを開ける、非常口の場所を示す（消防署で講習しておく）。地震で中断した発表再開時、散らばった避難者へどう周知するか。プログラムに心得を。

テロについて:テロは、防衛困難だ。火災、発煙に応じ、伏せる、低姿勢で退去など避難方法を知っておく。

2. 食事

懇親会や軽食で、ベジタリアンやハラールなどに配慮する。どの国人にもモスLEMはいる。

3. 祈祷場所の確保

モスLEMは、1日数回メッカに祈る。衝立で仕切った3帖ほどの空間と清潔な敷物を用意。

4. 提示機材の準備、交換

発表者が持参するPCは、方式の差で不具合がでる。当日朝のテストや、バックアップ機の準備必要。

5. 日報の発行

毎日、前日の簡単なニュースと当日予告(変更など)質疑や、面白いハプニングなど参加者の写真入りで親睦に貢献。

6. 懇親会中のイベント

FLEAT Iでは、懇親会の意義が十分に理解されておらず、長すぎる挨拶、日本式宴会のような騒々しい歌舞が提案され、進行に差し支えた。「懇親会は情報交換の場」だ。静かな時間が充分に必要。アトラクションを楽しむ時間を設けることは可。

特定の人を独占させない、問題意識を持つ同士を引き合わせる、立食テーブルの料理の前に停留して飲食させない、など流れを作り出す「ミキサー」を配置する。

7. サポーターの配置

「ASK ANYTHING」という札付きサポーターを数名配置し、案内や相談に応じさせる。数か国語対応の翻訳機を持たせる。同伴家族に対応。

8. 広報の工夫

「記者会見」事前に参加者が少ない、会議開催金が不足なとき、プレスクラブで大会役員が「プレスリリース」を配布、PRする。参加申し込みが目に見えて上昇したことがある(FLEAT I)。1981年はまだ活字の時代だったので英語教育関係の雑誌、新聞、視聴覚メーカーの業界誌などを招いてPRした。今はネットだが、使い方を考える。

9. 多元中継

教育工学系の学会では東京と長崎の会場を結んでやり取りした。時差が問題だが日本と豪州などをネットで結んだシンポジウムなども面白い。

放送大学では講師と別会場の受講者の映像を電氣的にひし形に歪ませて対談しているように見せたことがある。「合成ツーショット」。

以上はFLEATに限らず、筆者が各地の学会で見聞したことである。全員で経験を分かち合い、他の意見を理解してすばらしいFLEAT VIIを作り上げよう。

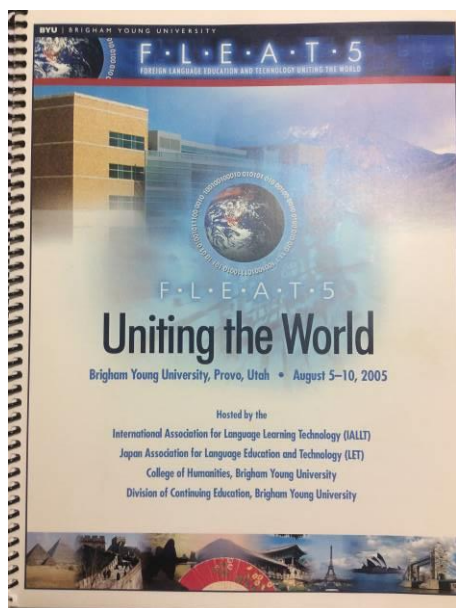
IALLTはどんな学会か

大八木廣人

FLEAT Vが開催される前年の2004年に、私は翌年の開催場所と同じBYU (Brigham Young University)でのSLM (Summer Leadership Meeting)に参加していた。SLMのことは最近Summer Summitと呼ぶことにしたようだが、北アメリカは広いので総会とSummer Summitを隔年交互に開催している。

Summer Summit は翌年の総会と同じ場所と期間に実施される理事会でもある。ほとんどの役員は2泊以上宿泊することになり、委員間の交流はかなり親密なものになっているように感じた。そのような仲間たちの中に、LETから岩崎暁男国際交流委員長と当時会長を務めていた私が飛び込んだので、即座に友人関係を築くことができた。理事会が階段教室で開かれるときには、各自がPCを利用してアイデアを出し合い、効率よく討論していた。招待者として参加したわれわれにもLETとしての意見を求められることもあった。

LETと大変関係の深いビクトリア大学のPeter Liddell氏のことを簡単に紹介しておこう。LETがFLEAT IとFLEAT IIを開催して16年後の1997年に、北米で初めてFLEAT IIIを主導的に開催したのがその当時IALLT会長だったPeter Liddell氏である。氏はドイツ語が専門の教授で、定年退職後の現在でも同大学の教員OB会会長を務めている。



FLEAT Vのプログラム冊子

Liddell氏が2004年に福岡の西南学院大学で開催されたLET全国研究大会に参加されたとき、私は岩崎国際交流委員長と一緒に博多駅の近くにある居酒屋に彼を誘って、彼の好きなビールで福岡の夜を楽しんでいた。スコットランド生まれでドイツにしばしば旅行しているLiddell氏はビール愛好家だと聞いていたからだった。ところが、ビールを飲み干すと、日本風の大衆酒場で焼酎を飲みたいと言いつつ、私たち3人は福岡市内の繁華街のある大衆酒場に入った。店内には長テーブルと長椅子があって、ぎゅうぎゅう詰めの状態でやっと場所を確保した。そこは大声を張り上げないと会話も聞き取れないほどのにぎやかさだった。なみなみと零れる焼酎を飲みながら心の触れ合いを感じることができた。このひと時は日本での忘れられない素晴らしい思い出になったと言ってくれたことがある。実はこの時の二か所の懇親の場で、日本におけるWorldCALL開催の話が持ち上がったのだった。福岡でのWorldCALL 2008開催4年前のことだった。彼のLETへの理解と適切なアドバイスがWorldCALL 2008開催に大きく影響したのは言うまでもない。

IALLT (the International Association for Language Learning Technology) はLET (the Japan Association for Language Education and Technology) より4年遅い1965年にNALLD (the National Association of Language Laboratory Directors) という名称で設立され、その後IALL (the International Association for Learning Laboratories) を経て、IALLTに名称変更された。IALLTの構成員はLETの場合よりかなり幅が広く、語学教員だけでなく、図書館司書、専門技術者、教

材開発者など多彩である。

LET の会則では「外国語教育を中心とする言語教育の理論および方法と、それに利用する教育メディア研究をおこない、…」という目的になっているのに対して、IALLT では「言語・文学・文化の指導及び学習のための開発・調整・評価・管理のためのテクノロジー指導を目指す」となっている。LET では education という言葉が使われているのに対して、IALLT では learning が使われているところが大きな違いかもしれない。

FLEAT の思い出

岩崎暁男

私は 1988 年 東京電機大学着任時に、LL の授業を担当することになったのを機に、LLA に入会しました。とりわけ教育機器に強いわけではなかったのですが、大学のみならず中学や高校でも LL 教室の設置が求められていた時期で、英語教育の柱として従来型ではない教育手法に対する好奇心もありました。その当時、東京電機大学では浅野博先生はすでに転出されていたものの、後日、会長になられた大八木廣人先生がおられ、多くの最先端のことを学ぶことができました。

一会員に過ぎなかった私ですが、ある日、国際学会の準備の件で会合があるので、都合がつくかとの連絡がありました。全く予期せぬ依頼だったのですが、丁度、勤務大学で海外の大学との交流を進めたり、協定校締結などの業務に携わっており、異文化交流には多大なる関心があったので、指定された新宿の喫茶店に向いたところ、鈴木博先生を筆頭に関東支部の主要メンバーが揃っておられ、

私は即、来るところを間違えたと思ったものでした。

その上、話を伺うと、この分野での北米のリーダー格である IALLT と LET が共催する次回の大会 (FLEAT III) の下準備の打ち合わせで、会長の羽鳥博愛先生のお供をすることですから、なおさら「そんな大役はとんでもない」との思いでした。LL 関連の研究業績がゼロに等しかったのも躊躇した大きな理由でした。しかし、しばらく中断していたこの大会を再開させることへの強い熱気と、無名会員である私への指名を意気に感じ、無謀にも参画したのが、私の LET における国際交流活動の第一歩でした。

こうして隔年で開かれる提携学会である IALLT の会合に、羽鳥先生とご一緒に 1996 年、会場校であるカナダ・ビクトリア大学に行き、翌年の開催準備を主要メンバーとしました。その時に初めて出会った Peter Liddell 先生とは、それ以来、非常に親しい仲となり、今でも家族ぐるみで交流があります。IALLT の会員はどこよりも hug が多い学会だと自認していますが、まさしくその通りで、会員同士の仲の良さには毎回驚かされます。学会には北米より夫婦揃っての参加も多く、大会後のパーティーでは、皆が混じってダンスというのが定番でした。

その後、2000 年に神戸ベイシェラトンホテルで開かれた FLEAT IV、2005 年ブリガム・ヤング大学での FLEAT V (そしてその前年の現地での事前準備打ち合わせ) と、会を重ねるごとに知り合いの輪 (hug する相手の数) が急速に増え、私には北米の様々な大学の教育実情なども知ることも出来る貴重な場でした。そして、そのような積み重ねを経て 2008 年の WorldCALL 2008 FUKUOKA につなが

っていきました。初めて Liddell 先生、大八木先生と福岡の居酒屋でこの話題が出た時は確かに唐突に思いましたが、そこまでの助走、とりわけ IALLT との交流の深さが大きな後押しになりました。と同時に、北米のみならず世界にということで、まさしく challenge（困難もあるが挑戦に値する）という気概を持ったものです。

大会開始数年前より準備が始まり、夏の学会時のみならず、関東・名古屋・関西・九州の各地で、年に数回以上も国際交流委員会を開き、このような会議を通して、LET の先生方ともお近付きになれたのも私には大きな収穫でした。期待していた通り、海外の方とも一緒に仕事をする事で輪がさらに大きくなり、互いの家庭に招き合うようになったり出来たのもありがたいことでした。このようにチームとしてまとまる事が出来、大会委員長の木下正義先生の強いリーダーシップのもと、WorldCALL を成功させることが出来たのは大きな喜びです。

その後、横浜サイエンスフロンティア高等学校を会場に開かれた 2010 年の LET 創立 50

周年記念大会に、IALLT の役員を招いたのを機に、私は国際交流委員を「卒業」した形になりましたが、思えば 1996 年からの 15 年間、大げさに言えば世界を股にかけて活動をし、人とのつながりを築けたことは、何よりの財産です。2010 年の大会後、拙宅にて IALLT の方々とのささやかなる食事会を開いたのですが、最初にビクトリアで出会った時には小学生であった我が家の子ども達も社会人になっており、Liddell 先生や Hendricks 先生とも時間の流れをしみじみと語ったものです。

2019 年に早稲田大学にて FLEAT VII が開催予定と伺い、2015 年にはハーバード大学に行けなかつただけに、是非とも旧友との再会をこの時に果たしたいと願っています。多くの素晴らしい人（quality people）との出会い——それが LET の国際交流活動を通して得られたことです。海外のみならず、打ち合わせ会合後、大八木先生を中心に、見上先生・黄金井先生・滝本先生達と大妻女子大学近くの中継料理屋での団欒も心温まる思い出です。皆さん、ありがとうございました。



食事会の様子（岩崎、Hendricks）

Memories of FLEAT III in Victoria

Peter Liddell

Former president of IALLT (2003-2005)

August 1997 in Victoria was “hot”—at least we thought so. Most of the 100 Japanese colleagues arriving said it was refreshing, and pleasantly warm. Having experienced a humid Tokyo heat-wave a year earlier, at the LLA conference in August 1996, I know what they meant!

FLEAT III was a unique cultural exchange in many other ways, too: it was the first FLEAT to be held outside Japan, and the first time that IALL (as it was called then) had met outside the United States; it was certainly the first time that most of us had arranged a conference entirely electronically, using e-mail and a new ‘wonder’ of the internet, an interactive website. The result was that 450 colleagues from 11 different countries enjoyed almost 100 papers and poster presentations in just 4 days (30 of them by Japanese colleagues). As the President of IALL, Professor Nina Garrett, said later, the conference was “a wonderful experience which bodes well for the worldwide collaboration that our technology increasingly powerfully supports.” President Hatori of LLA felt that his colleagues saw a significant ‘cultural’ difference in the research behind the papers. Where the Japanese tradition favored studies of course design and teaching materials, many of the other papers dealt with applications of specific software and hardware in teaching languages.

I have a strong sense that the success of FLEAT III gave impetus and encouragement to the organizers of the very first WorldCALL held in Melbourne, Australia in 1998. It is even more certain that it encouraged future FLEATs in Japan and the United States, and future WorldCALLs, including the one in Fukuoka in 2008.

I wonder how many of you reading this remember (or even, like me, still use) the souvenirs of FLEAT III—the coffee cups, shirts or bags with our own, unique orca design.

It reminds us of the native traditions of the First Nations of Vancouver

Island, and recognizes that our University stands on the traditional cultural lands of three native peoples. Professor Hatori was struck by the design when Akio and I met him at the airport, and wondered who designed it. Now I can tell you: it was Mary Sanseverino, the person among our staff who deserves most thanks for the success of FLEAT III. She has retired recently, after teaching computer science to UVic Engineering students for many years. Now, in her third career, she is mapping the climate changes of the past hundred years by retracing the paths of the original photographers, climbing in the Canadian Rockies. Quite a change for a computer science professor!



FLEAT III coffee mug

Another reference to native Indian traditions was the potlatch (a festival of traditional drumming, dancing, and gift exchanges) that ended the conference. Mary and I presented a ‘talking stick’ to the respective Presidents Garrett of IALL and Hatori of LLA. The stick represents the history of one native clan, and is sacred to that clan. Only the holder of the stick may speak at clan gatherings. In that spirit, IALLT passes their stick to the host of the next conference, where it carries on the tradition and the memory (for some of us older members) of the original carvers and of the FLEAT conference. I wonder what happened to the LLA stick?

Organizing the 1997 FLEAT, I renewed many acquaintances in Japan, and worked then and later with two Japanese colleagues whom I consider good friends, Hiroto Ohyagi, who shares my love of gardening and good beer!, and Akio Iwasaki, who shared thousands of emails as we prepared for FLEAT III, and who welcomed my wife and me into their home. Harold Hendricks has written elsewhere about his personal experiences of other FLEATs and other visits to Japan, but he missed one ‘gem’—the ‘four musketeers’ visit to a *ryokan*, organized by Hiro after the LLA 50th anniversary conference in Yokohama. The four of us spent time among the fumaroles near Fuji-san, explored the history of the Edo period around Hakone, and shared many memorable conversations. That is an unexpected, but life-enriching result of the many times our

paths have crossed at international conferences before and since Victoria in August 1997. It did indeed bode well for worldwide collaboration supported by the culturally rich technologies that first brought us together.

When I first wished LLA “kanpai” at the LLA 50th Anniversary dinner, some of you may remember that my glass was indeed dry (until someone quickly filled it!). Now I would like to wish you another, full-glass “kanpai” for the success of FLEAT VII at Waseda University, in 2019.

With all best wishes.

Thoughts on the FLEAT Tradition

Harold H Hendricks

Former president of IALLT (2013-2015)

My first connection with the FLEAT tradition goes back to the 1970s when Dr. Yoshinobu Niwa made a visit to Brigham Young University to learn of our work in computer-assisted instruction. I was a newly hired member of a team that was developing math and English courseware and I had the pleasure of escorting Niwa-sensei around the BYU campus and demonstrating our CAI system to him. We discussed the exciting possibilities that the new technologies were bringing to the teaching of language. We struck up a friendship that was renewed in 1992 when I was invited to participate in FLEAT II at Nagoya, and Dr. Niwa was the conference chair. By that time I had become a

member of the International Association for Learning Laboratories (IALL) after being appointed the supervisor of the Humanities Learning Resource Center at BYU.

FLEAT II was my first visit to Japan and I was enthralled by the wonder and beauty of the cities and country, welcomed by the polite and friendly people, and impressed with the dedicated teaching and implementation of technology at Chubu University. I was amazed by my first *shinkansen* trip to Tokyo where I was awed at the crowded bustle of the city that still seemed somehow organized and wondered at the marvels shown to us by Sony and Panasonic. It was a wonderful experience for a small-town American to be immersed in such rich and historic culture. Not only was the cultural feast of sights and sounds breathtaking, but the conference itself was an expansive look at what was being implemented in the field of language instruction. Through the days of the

conference I made many new friends from Japan and around the world. At the end of the conference I was honored to be given a personal tour of Kyoto by Hiroyuki Obari, the memories of which I treasure to this day.

It has been my great pleasure to have attended all the following FLEAT conferences where I have been able to continue to make and renew friendships from Japan. The wonders of Japan were again manifest during my visits for FLEAT IV (and for WorldCALL 2008 and LET 50.) Again I was given the chance to experience a deeper look at Japanese life and culture by Professors Akio Iwasaki and Hiroto Ohyagi, for which I am continually grateful. The beauties of the Pacific coast of Canada and the majestic culture of the First Peoples there were wonderfully offered by Peter Liddell at FLEAT III in Victoria, British Columbia, where we again renewed friendships and made many friends.



2つの学会の友情（FLEAT VI 会場のハーバード大学にて。左から Hendricks、大八木、Liddell）

All of the FLEAT conferences have been stimulating in their overview of the state of the fields of language learning research and implementation. We have been able to draw the best minds of many institutions in Japan, North America, and around the world. The sense that not only can we use the tools of technology to help improve our language teaching and learning but that in so doing we can improve the communication and understanding between nations is always undergirding all that we do.

It was my great honor to have hosted FLEAT 5 at my own campus in 2005 and to preside over FLEAT 6 with Thomas Hammond at Harvard as I completed my presidency of IALLT. Through all of these conferences, the dedicated and amicable spirit of serving faculty and students in the quest for language proficiency has shown brightly through the beautiful locations, the interesting and intellectually stimulating presentations, and the cultural activities that have accompanied all FLEAT conferences. It is this spirit of service and friendship that has distinguished the FLEAT series of conferences from other academic gatherings and has guided me in my own work. I am pleased that I have had the opportunity to be part of such a tradition and I hope that the FLEAT conferences might continue to provide both the academic discoveries and the human connections that have marked our gatherings in the past. I am certain that FLEAT 7 at Waseda University in 2019 will continue this wonderful tradition.

LLA から LET へ

丹羽義信

私が最後の会長だった 1993 年ごろから、理事会で LLA の名称に不適切を唱える声があり 2000 年浅野博会長のとき遂に LET と変わってしまった。随分昔のことで、恨みを言うのはまったく無責任であるが、しかしこうゆう機会があり、かつ何らかの役にたつかもしれないならば許されるであろう。

LLA は錦の御旗を掲げていた。LL は構造言語学に支えられたオーディオ・リンガル・アプロウチという裏付けの学説もあり、政府も金をつんで LL 教室を全国に建て、錦の御旗がいたるところで翩翩と翻ったのは当然であった。私が会長になったとき、アメリカでも LL は盛んで立派な施設をこぞって持ちつつあった。ただ日本と違っていたのは、主として英語のできない留学生が利用し、英語を母国語としているアメリカ人はドイツ語・フランス語・中国語・日本語などのため使っていた。施設といい、学説といい、類似する点が多かった。

かくて成立した FLEAT Conference こそは LLA を支えるもうひとつの錦の御旗とあって良いだろう。いくつかの幸運を忘れることは出来ない。両学会は内容に共通性が多く当時の 3 会長 Stone、Trometer、Otto は国際化に熱心で、中部大学もまた強く国際化を求めている。第 2 回の中部大学での FLEAT Conference は大学の多額のサポートがなかったらできなかったと思う。またその後も今回まで続いているのは両国の会員の固い約束と友情によるもので感謝に絶えない。外国の学会とこのような関係を持つことはけっして容易ではない。

錦の御旗は捨てる必要ない

そもそも外国語習得には2つの方法がある。一つは言語の構造を教え、日常言語に迫る方法で、もう一つはいきなり日常言語に接し言語構造を帰納してゆく方法である。前者の代表的なものはグラマー・トランスレイション・メソッド(GT-法)であり後者はナチュラル・メソッド(Natural法)である。前者の大きな欠陥は文字を重視し音声を軽視したことである。

LLAがLETに変わった時の習得状況はどうか。当時の授業はGT法+LLに外ならない。かつLLのもたらすものは1. 音声反復 2. パターン反復である。さらに大きな特徴はLL教室の共有から中高大が一体になって動いたことである。

LETに変わって直面したのは何か。Natural法はなかなか適用が難しい。さらに機器の保証はなく内容も反復の項は極度に欠けることになる。大切なものをほとんど失ってしまった。緻密に研究し、その上で変更をすべきであった。

LETに望むもの

1. LLA>LETなどの文字をいれ、かつての錦の御旗のLLAのなした活躍を偲ぶ
2. GT法を維持し言語習得においてLLAの強調した<音声反復>を強化する
3. Natural法の機器を模索し新機種の発掘に努力する
4. 小中高大を視野におく
5. FLEAT Conferenceを継続し、発表内容を交換して切磋琢磨する
6. 高度な実験も行い結果を現場に反映する

本稿を書き上げた段階(1月27日)でFLEAT特集号にかわったので以下の点を追加します。

1. 私が会長になったとき名古屋大学での経験からなんとかLLAに国際化を持ち込むことができないか、と考えていた。折しも関西支部にホワイトさんという外国人がいて、IALLというよく似た学会がアメリカにあるからそこと提携するようという。もしやるならIALLの会長に連絡していただけないかということが起こった。是非とお願いしたら数日後ブリュセルで間もなく機器に関するヨーロッパの学会があるからそこで会いたいという返事が来た。外国へはまだ行ったことはなく不安であったがOKした。かくてブリュセルでは3人の会長が私を待っていて提携はすぐまとまった。まず「文書のやりとりをする」というのがブリュセルでした約束である。不思議なことに第1回のFLEATのことを会長らは全然知らなかった。
2. 帰って中部の運営委員会で報告すると一応皆さん了承した。その時奇跡が起こった。故月山秀夫氏が突然中部で国際学会をやろう、と大声で言ったのだ。第1回のFLEATがどんなに困難であったかを皆さんよく知っていたので、冗談かと思った。
3. IALLは非常に友好的で学内の宿泊施設を提供したり特別なもてなしをしていただいている。発表内容も類似性が多い。「学会が文書のやりとりをする」ことは深い関係を示すもので単なる外国人会員でなく特別枠をもうけてほしい。

LLA シニア会に託す夢

金田正也

1. 初心忘れず

私たち LLA/LET の開く年次研究大会は当初から文部省/文科省の後援を毎年頂いてきました。英語に限らず外国語教育の学会/研究会は数多くある中で、この扱いを受けているのはかなり特異な例と思われませんが、その意味にお気づきでしょうか。

一つには知識だけでなく使いこなすための外国語の習得は生涯の学習であり、これを授ける道具や技法の開発/研究と実践は学校教育の中はもちろん、これを基盤としたマクロの取組とする理念です。このため、後援申請の窓口を当時社会教育局にあった視聴覚教育課(現情報教育課)に求めてこれが認められ、前例となってその後も毎年の申請受理に及ぶ一因となっています。大きな innovation でした。設立初代中島会長(東大)、黒田副会長(筑波大)、西本(視聴覚教育学会長/ICU)副会長ほかの幅広い強力な指導体制のあったことも大きな強みであったことももちろんです。

「外国」との距離が益々近くなる流れの中で、EU に負けず日本の「第 2 言語習得」の分野をどうするかは教育界だけの課題とするには荷が重すぎます。実業界、政界、マスコミはじめ世間一般の知恵や力を合わせる必要は言うまでもありません。それでも現実に口火をきるのに最も近いと期待されているのは、やはり学校教育界の中のその道の担当者であり、専門研究者ではないでしょうか。

人類の進歩の歴史は一面には道具の進歩の歴史とも言われる中で、新しい可能性を求めて私たちは LET に集まり、努力を重ねて来ました。それなりの足跡を残しつつも千里の道

は遠く、定められた区間を走ってバトンを次の走者に渡した後のシニアの世界には、今までに無かったまた全く新しい天地が開いているのに気づきます。

2. 新しいつどいに

初心忘れずその舞台を開拓して行くのも私たちの楽しみであり、新しい使命と見る自由もあるはずですが、今までの体験を踏まえつつ、既存のあらゆる細かな規制、組織、慣習に捕らわれない角度から眺め直せる立場にあります。ただしかし、その言動が現役走者への干渉にならないことや、自分自身の生理的・生命的限界の自戒の認識は欠かせません。自分のことは自分が一番知っているはずながら、たとえば身体の奥底に潜む癌の早期発見は素手の自分には無理です。もっと次元の低い話が、自分に気付かない服装の乱れも他人にはすぐ目につきます。いたわりと励ましの心を持ってお互いに声を掛け合うことの大切さが身に沁みます。

道具活用面で近年顕著な展開を見せる ICT の環境下で頻出する share (共有) という表現は救いになりそうです。厳密な論証を唯一の武器とし、「まちがい」の許されない勤務の世界を卒業した「同窓生」が、なお体験や思い出や願望の夢を相互にシェアできて進歩できるつどい、それにも大いに「道具」を活用しようではありませんか。その工夫をするのも LET ならではです。

故浅野元会長や大八木元会長ほかのお世話で LET には LLA シニア会があり、ご覧の会報があるわけですが、その動きはイマイチ知られてないようです。支部の末席に並列して本部ホームページに直属し、別段の会費も不要、今のところ格別の会則もなく自由、LET

の会員でも退会された方でも、この会には誰でも参加が許される特別の待遇を受けています。現在のところ本会には URL がありませんが、シニア会独自の mailing list で投稿を通し

て相互に自由に交信できます。日時や場所を決めて集まる研究会や講演会の必要なしに交流のできるこの種のチャンネルに皆で工夫を加えてゆくことから第一歩が始まると思います。

編集後記

- ▶ 本会の名称は「LLA シニア会」となっていますが、LLA 時代の頃から会員だった人たちが中心になって立ち上げた任意団体で、LET 会員の若い方々の加入も大歓迎です。会則も会費もなく、元 LLA 会員か現 LET 会員ならどなたでも入会できます。ご希望の方は、お名前、住所、メールアドレスを記入して下記にお申込んで登録してください。また、すでに会員の方で、ご推薦いただける方がおられたら同様に登録してください。

連絡先：shimada-k@takasaki-u.ac.jp（高崎健康福祉大学 嶋田和成）

なお、嶋田和成氏は本通信の編集作業に携わっていただいた方で、LET 本部との連携等でもお世話になっています。

- ▶ ご執筆いただいた方々を簡単にご紹介します。小池生夫先生は JACET の会長として日本の英語教育界に大きな影響力を果たされたことはよく知られているところですが、LET 関東支部の評議員としても長年ご尽力いただいています。宇佐美昇三先生は NHK 語学番組ディレクターのとき『発想別英語会話教授法』を著し、同放送文化研究所での経験を生かして LL の調査研究でも実績を上げられました。岩崎暁男先生は国際交流委員長として IALLT や WorldCALL と LET の連携で飛躍的な実績を残されました。Peter Liddell 先生は FLEAT III を本務校のビクトリア大学で開催して以来 LET との連携に大きな役割を果たされ、WorldCALL の役員として福岡での WorldCALL 2008 開催にお力添えをいただいた IALLT の元会長です。Harold Hendricks 先生は FLEAT V を自校ブリガム・ヤング大学で開催し、FLEAT VI がハーバード大学で開催された頃の IALLT の会長で、WorldCALL 2008 や LET50 周年記念大会等で数回来日しておられます。丹羽義信先生は FLEAT II 開催を主導された方で、LLA 第 5 代会長です。金田正也先生は LLA 設立に奔走し、最も先進的な LL 授業用教材開発や学習方法をわが国に初めて紹介された方です。
- ▶ 今回初めて企画した座談会「FLEAT I 開催よもやま話」には、FLEAT I 開催当時若手として裏方で大活躍された三氏にご登場願ひ、大会実行委員としての裏方の話題を率直に披露していただきました。国際大会のような大規模な大会開催に必要な土台造りが今後大いに役立つのではないかと判断したからです。

大八木廣人記